

藤沢法暎著『ドイツ人の歴史意識  
—教科書にみる戦争責任論—』(亜紀書房, 1986年)

宮 園 衛

I

「わたしたちは(こんにち)二つのものを失った……。ひとつは、戦後の日本人がこれが新しい日本であり日本人であるという基本となる『あかし』。(つまり)戦後の日本, 日本人の倫理・論理の双方にわたっての基盤の喪失だった。そして, もう一つの喪失は, 日本自体をふくめて世界のあるべき未来への変革の『カギ』の喪失だった。」

(小田実『「問題」としての人生』講談社現代新書, 1984年p.179)

戦後民主主義の形骸化が言われる。折しも, 教育課程審議会における高校「社会科」解体への手続きは, それを象徴するかのような出来事であった。本書は, このような現在の日本の状況を照らし出す鏡の役割を果たしている。事実, そのような意図で本書は書かれている。

著者は, 次の2つの関心から現代ドイツ人の歴史意識に注目する。

まず, 「形骸化・空洞化の著しい日本の戦後民主主義と比較した際に認められる西ドイツ民主主義の健全さである。」(「はしがき」)共にファシズムと戦争を体験し, 戦後は西側陣営の一員としてめざましい経済成長を遂げた両国に, なぜ, 民主主義における違いが生じたのか。

次に, 「世界でもっとも民主的な憲法をもつといわれたワイマール共和国の下でなぜナチスが台頭し, 12年間も政権を握り続けたのか。」(「はしがき」)議会制民主主義からファシズムへの逆転現象がなぜ起きたのか, という疑問である。そこには, 日本国憲法の下での民主主義の形骸化・空洞化現象への警鐘の意味が込められている。

このために本書では, 教科書における戦争責任の受けとめ方を分析することによって, 20世紀ドイツ人の同時代認識を明らかにしていく。「戦争責任の受けとめ方は, 戦後民主主義の質を規定する」と考えるからである。

II

本書の内容構成は, 次のようになっている。

第一章 西ドイツ国民は第三帝国をどうふり返っているか

— 戦争責任・戦後責任の問題と関わって —

第二章 西ドイツの教科書にみる戦争とファシズム

第三章 ワイマール期の教科書にみる歴史意識

第四章 ナチス・ドイツの教科書にみる歴史意識

第五章 戦後初期西ドイツの教科書にみる歴史意識

第六章 歴史教科書づくりにみる国際主義

— 国際教科書研究所の活動を中心に —

終章 西ドイツの行動する若者たち

— 平和と「もう一つの生き方」をもとめて —

第一章、第二章で、現在の西ドイツ国民が戦争責任を真正面から受けとめる姿勢を明らかにする。ヴァイツェッカー大統領の終戦40周年記念講演は、それを示す象徴的な出来事である。

しかし、このような民主主義の健全さは、苦渋に満ちた歴史を直視する中から生まれ、定着したものである。それを、第三章から第五章にかけて明らかにしていく。特に、ワイマール期の歴史教育が、ナチズムの勝利をもたらしたという指摘は印象的である。(p.123)

第六章では、教科書作りのレベルにおいても、戦争責任への深い反省から国際協力体制作りに努力していることを指摘する。第二次大戦は、ナチス・ドイツのポーランド侵略に始まる。そのポーランドとの間で合意された「歴史・地理教科書にたいする勸告」は、教科書作りでの国際主義を象徴するものである。侵略国に対する戦争責任を、真剣に受けとめる姿勢の表れである。

終章では、「一方では苦痛に堪えて戦争責任・戦後責任の問題を、他方では『もう一つの生き方』の問題を、真剣に自分の胸に問い直」(p.278)している現代西ドイツ青年の中に、「日本人の新しい理想』」像を求める。

III

若者の無気力、無関心が言われる。著者も指摘するように、まともに社会の問題を考えることを阻む風潮が広まっている。(「あとがき」)そして一方では、国際化の掛け声とは逆行する「日本史」教科書も発行されている。その意味で、現代の日本は西ドイツと対照的であろう。

だがその際注意すべきことは、「戦争」について知りたいという中・高校生の願いを、学校教育が必ずしも正面から受けとめていないように思われる、ということである。(『筑波社会科研究』 本号における評者の「研究会報告書」参照のこと。pp.53-56)

従って、何よりもまず、教師がこの問題に真剣に取り組むことが先決ではなかろうか。評者の世界・世界を貫く作業内容でもあり、本書を読んで、そのような想を一層強くした。

(筑波大学大学院)